

教育研究業績書

2022年05月09日

所属：情報メディア学科

資格：教授

氏名：鯉坂 恒夫

研究分野	研究内容のキーワード
ソフトウェア工学	要求仕様, プログラム形成, 記号論, 社会情報学
学位	最終学歴
工学博士	京都大学大学院工学研究科博士後期課程情報工学専攻

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 学修成果の定着と成績評価の精密化	2011年～現在	定期試験の弊害(過去問暗記と忘却)を是正するため、毎回授業のワークシート作成と評価を積み上げる。 業務・システムの分析設計技法を学ぶにあたり、実企業・実システム事例に即して実感を持てるようにする。
2. 実践的課題の導入	2015年～現在	
2 作成した教科書、教材		
1. 『プログラミング言語』	2000年	C言語によるプログラミング教科書。編者および分担執筆担当。オーム社より出版。 ライフサイクル, 方法論, モデリングと環境, ソフトウェアプロセスなどを簡潔に網羅する。 サイエンス社より出版, 単著。
2. 『ソフトウェア工学入門』	2008年	
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 大学院学生研究指導	1986年～2020年	京都大学大学院工学研究科情報工学専攻修士課程・博士課程, および和歌山大学大学院システム工学研究科博士前期および後期課程において。 和歌山大学において, 主査4件, 副査4件。 システム工学専門教育に加えて, 倫理教育, サイエンス論, 教養ゼミナールなどを担当。和歌山大学「教養の森」センター副センター長(2013-2016)。
2. 博士学位論文審査	2004年～2014年	
3. 教養教育担当	2013年～2020年	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
1. 情報構造を交換する情報処理システム	2004年, 2005年	特願2004-188399, 特開2005-038418, 不承認。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 文部省派遣在外研究員	1993年5月～1994年3月	英国ダーラム大学計算機科学科 独立法人化(2004)以降は教育研究評議員 2002年新設の和歌山大学システム工学研究科博士後期課程の設置審査結果(Dマル合) キャリア支援・男女共同参画担当 全学教員組織の長(もうひとつは人文社会科学系)
2. 和歌山大学評議員	2001年～2006年	
3. 博士後期課程研究指導教員認定	2001年	
4. 和歌山大学学長補佐	2012年～2014年	
5. 和歌山大学工学自然科学系長	2019年～2020年	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. デザイン情報学入門	共	2000年4月	日本規格協会	(和歌山大学システム工学部デザイン情報学科編：鯉坂恒夫, 山岡俊樹, 他14名) デザイン情報学という新領域をオムニバス形式で概説する書。
2. マルチメディアドキュメンテーション	共	2000年7月	共立出版	(池田克夫編：鯉坂恒夫, 小町祐史, 他3名) 文書電子化に関する当時最新の技術を網羅した書。221p。
3. 新世代工学シリーズ プログラミング言語	共	2000年7月	オーム社	(鯉坂恒夫編著：小林孝史, 渡部広一, 深海悟, 他3名) プログラミングの言語と技法の教科書。167p。
4. 方法論工学と開発環境	共	2001年11月	共立出版	(鯉坂恒夫, 佐伯元司) ソフトウェア工学における仕様化技術, および開発支援の技法と統合化ツールについて体系的に解いた専門書。217p。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
5. ソフトウェア工学の基礎X	共	2003年11月	近代科学社	(鯨坂恒夫, 満田成紀編) 日本ソフトウェア科学会の国内会議論文集. 264p.
6. Principles of Software Evolution	共	2004年9月	IEEE Press	(Katsuro Inoue, Tsuneo Ajisaka, Harald Gall eds.) ソフトウェア発展に関する国際会議論文集. 165p.
7. ソフトウェア工学入門	単	2008年3月	サイエンス社	ライフサイクル, 方法論, モデリングと環境, ソフトウェアプロセスなど, ソフトウェア工学の知識体系(Body Of Knowledge)を簡潔に網羅した事典的図書. 127p.
2 学位論文				
1. Studies on Automatic Program Generation Using Functional Model of Specification	単	1987年2月	京都大学	博士論文. ソフトウェア仕様記述の関数的構成法と, それに基づき手続き型プログラムを自動生成する方法に関する研究.
3 学術論文				
1. Integral Software Development through a Functional Language [査読付]	共	1982年9月	Proc. Int'l Symposium on Current Issues of Requirements Engineering Environments, Ohm/North-Holland, pp.33-38	(鯨坂恒夫, 阿草清滋, 大野 豊) ソフトウェアとして実現すべき問題の仕様記述言語として, データ構造定義を合わせ持つ関数型言語を用いることにより, 入出力データの定義からそれに応じた処理を導出するジャクソン法に従う設計が定式化できることを論証した.
2. A Combinatory Language for Computer Aided Software Design [査読付]	共	1984年3月	Proc. Int'l Workshop on Models and Languages for Software Specification, pp.132-134	(鯨坂恒夫, 阿草清滋, 大野 豊) データおよび関数ともにそれらを構成する結合子群を核とする言語によって, 系統的なソフトウェア設計の計算機支援が可能となることを示した.
3. 関数スキーマベースを用いたソフトウェア設計自動化 [査読付]	共	1985年2月	情報処理学会論文誌第26巻第2号 pp.304-311	(鯨坂恒夫, 阿草清滋, 大野 豊) 関数的モデルに基づく仕様の部品化再利用によるソフトウェアの自動設計について述べた.
4. ソフトウェア設計自動化のための仕様記述言語F [査読付]	共	1986年7月	情報処理学会論文誌第27巻第7号 pp.688-696	(鯨坂恒夫, 阿草清滋, 大野 豊) ソフトウェアの設計工程を定式化する新しい関数型言語を提案した.
5. An Automatic Program Generation System Based on Function Schema Base [査読付]	共	1987年10月	COMPSAC 11th, IEEE Comp. Soc. Press, pp.214-220	(鯨坂恒夫, 阿草清滋, 大野 豊) データ仕様を中心とする問題記述から, これに対応する自動検索された関数仕様を仲介として, 手続き型プログラムを自動生成するシステムを考案, 設計, 試作した.
6. A Software Process Model Based on Unit Workload Network [査読付]	共	1989年10月	Proc. 5th Int'l Software Process Workshop, IEEE Comp. Soc. Press, pp.75-97, 167-168	(松本吉弘, 阿草清滋, 鯨坂恒夫) 起動/終了条件を含む単位作業記述のネットワークによって, 実際のソフトウェア開発保守過程をモデル化できることを指摘した.
7. A Distributed Type Computer-Aided Software Requirements Engineering Environment [査読付]	共	1989年12月	Distributed Computer Control Systems, Pergamon Press, pp.1-7	(松本吉弘, 鯨坂恒夫) ソフトウェアシステムの要求分析・定義を分散環境で支援する方法について検討した. モデル/ビュー対応とソフトウェア構成要素間の関係を明らかにしている.
8. KyotoDB Supports Software Processes [査読付]	共	1990年10月	Proc. 6th Int'l Software Process Workshop, IEEE Comp. Soc.	(松本吉弘, 鯨坂恒夫) ソフトウェアエンジニアリング・データベースにおけるプロセスプログラムの記述, 実働, 変更支援, および並行非同期的協調活動を支援するためのモデルについて提案した.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
9. A Data Model in the Software Project Database KyotoDB [査読付]	共	1990年11月	Press, pp.73-75 日本ソフトウェア科学会英文論文誌第2巻, pp.103-121	(松本吉弘, 鯉坂恒夫) ソフトウェアエンジニアリング・データベースのためのデータモデルについて論及し, プロジェクト, プロセス, プロダクトおよびその関係記述が自己反映的複合オブジェクトモデルになるべきことを究明した.
10. Modeling of a Flexible Software Factory in KyotoDB [査読付]	共	1992年4月	Advanced Database Research and Development Series, Vol3, World Scientific, pp. 383-390	(ベイコ・セツパネン, 松本吉弘, 鯉坂恒夫) ハードウェア工業のフレキシブル生産方式を参考に, ソフトウェアリポジトリを中心とする, 工程変更柔軟なソフトウェア生産方式について, 移動電話システムの実設計を題材に実証した.
11. ソフトウェアエンジニアリング・データベースKyotoDBの設計と実現 [査読付]	共	1992年11月	情報処理学会論文誌第33巻第11号 pp.1402-1413	(鯉坂恒夫, 松本吉弘) ソフトウェア開発保守におけるプロセスとプロダクトを統合的に管理し, CASEツールの相互接続と協調活動を支援する開放型プラットフォームについて, そのオブジェクトモデルによる設計と実現の詳細を論述した.
12. 開放型CASEプラットフォーム [査読付]	単	1993年3月	コンピュータソフトウェア (岩波書店), 第10巻第2号 pp.4-12	ソフトウェア開発保守を支援するさまざまなツールを統合CASE環境に構成する方法において, 意味情報の共通認識, モデル依存と非依存の区分の重要性について論じた.
13. Reuse of Software Semantic Elements [査読付]	単	1993年3月	Proc. 2nd Int'l Workshop on Software Reusability, pp. 1-4	プログラムや仕様記述に普く含まれるソフトウェア本来の意味要素を同定するプロダクトモデルを提案し, これをもとにしたソフトウェアデータベース, 再利用技術, 設計方法論やソフトウェアメトリクスの方向について述べた.
14. ソフトウェア評論 Emeraude PCTE [査読付]	共	1993年3月	コンピュータソフトウェア (岩波書店), 第10巻第2号 pp.65-77	(鯉坂恒夫, 沢田篤史, 満田成紀) ソフトウェアツールのための共通的环境 (国際規格) PCTEについて, その設計思想を分析し, 実現・運用の実際を詳述した.
15. A Semantic-Directed Graph Editor on PCTE [査読付]	共	1993年11月	Proc. Joint Conference on Software Engineering '93, pp.69-76	(満田成紀, 鯉坂恒夫, 松本吉弘) 固有のツール機能に依存しないユニバーサルなグラフエディタの設計, 開発について述べた.
16. Utilities for Avoiding Constraints Violation in Creating and Updating the Data in PCTE [査読付]	共	1993年11月	Proc. PCTE '93 Conference, PCTE Technical Journal, No.1, pp.93-113	(沢田篤史, 満田成紀, 鯉坂恒夫, 松本吉弘) 拡張した実体-関連モデルに基づくソフトウェアリポジトリPCTEでは, モデル上で十分な制約管理ができないことを指摘し, それを体系的に補う方法とツール群を提案した.
17. Toward the PI-CASE : Process Integrated CASE Environment	単	1994年2月	Technical Report 1/94, Computer Science Department, SECS, University of Durham	プロダクト管理中心のソフトウェア開発環境に作業プロセスを統合し運用する方法について論じた.
18. Meta-Integration for Process Integrated CASE Environments [査読付]	単	1994年10月	Proc. 9th Int'l Software Process Workshop, IEEE Comp. Soc. Press, pp.62-66	ソフトウェアプロセス (人間系の活動) および計算機支援によるソフトウェア開発保守環境 (機械系の活動) におけるサービスカテゴリとその間の相互作用を究明した.
19. A Facility to Trace Dependencies Between PCTE Objects for Software Maintenance [査読付]	共	1994年11月	Proc. PCTE '94 Conference, PCTE Technical Journal, No.2, pp.332-350	(ピエリック・フィヨン, 満田成紀, 沢田篤史, 鯉坂恒夫, 松本吉弘) ソフトウェアリポジトリPCTEを用いた変更波及解析の手法と統合的プロダクトモデルについて述べた.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
付]				
20. ソフトウェアプロセス---プロセス支援環境 [査読付]	単	1995年5月	情報処理第36巻第5号 pp.431-437	プロセス中心のソフトウェア開発保守環境におけるプロセスのモニタリング、プロセスの制御とそのポリシー、プロセスの変更などについて述べた。
21. Generating Data Access Programs from PCTE Schemas with Constraints [査読付]	共	1995年9月	Int'l Journal of Software Engineering and Knowledge Eng. Vol.5, No.3, pp.327-345	(沢田篤史, 満田成紀, 鯉坂恒夫, 松本吉弘) ソフトウェアリポジトリPCTEのデータモデルに、その制約管理の弱さを補うよう体系的な制約条件記述を付加した。さらに、個々の記述に対応するデータ操作プログラムを自動生成する機構を考案、設計、実装した。
22. The Software Quark Model: a Universal Model for CASE Repositories [査読付]	単	1996年3月	Information and Software Technology, Elsevier Science, Vol.38, No.3, pp.173-180	プログラムや仕様記述に普く含まれるソフトウェア本来の意味要素を同定するプロダクトモデルを「ソフトウェアクォークモデル」として完成させ提案した。
23. 情報発信・伝達技術の現状と展望 [査読付]	共	1996年7月	システム/制御/情報 第40巻第7号 pp.274-278	(池田克夫, 鯉坂恒夫) 統合的情報処理環境における情報発信・伝達技術について、その組織的(論理的)側面に重点をおいて述べた。
24. Cプログラムに対するカプセル発見手法とその支援ツール [査読付]	共	1996年10月	電子情報通信学会論文誌D-I第79巻第10号 pp.745-758	(小田章夫, 鯉坂恒夫) 機能モジュールの平板な集合で構成される手続き的プログラムを解析し、保守性の高いオブジェクト指向的なカプセルの集合に再設計する方法とそのための半自動化ツールを開発した。
25. A Semantic Analysis of High Precision for Software Evolution [査読付]	単	1998年4月	Proc. Int'l Workshop on Principles of Software Evolution, pp.43-47	発展性のあるソフトウェアを形成するため、安定で変化しにくい部分と変更を受け入れやすい部分を見きわめることができる、ソフトウェアの精細な意味的解析法を提案した。
26. Electronic Commerce for Software [査読付]	単	1998年9月	Research and Advanced Technology for Digital Libraries -- Lecture Notes in Computer Science 1513, Springer, pp.791-800	ソフトウェアというデジタルプロダクトに対する電子商取引の特性を、とくに受注ソフトウェアにかかる企業間取引に必要なシステムの論理的アーキテクチャを複数の視点で示した。
27. ソフトウェアリポジトリにおける意味制約の管理 [査読付]	共	1998年11月	情報処理学会論文誌第39巻第11号 pp.3097--3109	(沢田篤史, 満田成紀, 鯉坂恒夫) データ構造のトポロジの記述と、継承や集約を含めた意味制約の体系的な記述を明確に分離し、制約処理をリポジトリ上のデータ記述としてモジュール化して扱えるようにした。
28. DSSSL Application for a JIS Publishing System [査読付]	共	1998年12月	Proc. SGML/SML Japan '98, Graphic Communications Association, pp.85-97	(T. Ajisaka, J. Adachi, Y. Komachi, T. Sawada) 文書スタイルの意味仕様記述言語を実際の出版システムに適用し、その実用化可能性を示した。
29. Manipulating Software Semantics with Unified Computational Model and Software Quark Model [査読付]	共	1999年12月	Proc. 6th Asia-Pacific Software Engineering Conference, pp.476--483	(野呂昌満, 鯉坂恒夫) ソフトウェアの意味変換を巨視的意味モデルと微視的意味モデル、静的意味と動的意味の協調によつて的確に記述できることを提案した。
30. Software Quark Model: An	単	2001年9月	Proc. Int'l Workshop on	ソフトウェアクォークモデル(粒子的意味モデル)によつてソフトウェア発展を計量化することについて述べた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Elementary Particle Model for Measuring Software Evolution [査読付]			Principles of Software Evolution, pp.79-82	
31. 情報相分割にもとづくユーザインタフェース設計 [査読付]	共	2002年11月	電子情報通信学会論文誌Vol. J85-D-I, No.11, pp.1047--1056	(満田成紀, 鯉坂恒夫, 沢田篤史) 同じ情報がメモリ・ファイル・UIパネルと異なる物理媒体上で異なる表現と扱いを受ける状況を明らかにし, それをもとにUI設計を駆動することを述べた.
32. Functional Metrics using COSMIC-FFP for Object-Oriented Realtime Systems [査読付]	共	2003年6月	Proc. 13th Int'l Workshop on Software Measurement, pp.177-185	(S. Nagano and T. Ajisaka) 実時間システムのオブジェクト指向分析・設計に用いることができる機能規模メトリクスについて述べ, その適用法を示した.
33. Improvement of an Analytical Model by Extracting Inappropriate Areas via the Functional Size Measurement Method [査読付]	共	2005年6月	Proc. 15th Int'l Workshop on Software Measurement, pp.121-128	(S. Nagano and T. Ajisaka) 機能規模計測法において, 機能単位の認識・分割が正確に行えない場合を把握することにより, 分析モデルの向上をはかった.
34. 制御系ソフトウェアのオブジェクト指向分析に基づく機能規模測定法 [査読付]	共	2008年12月	電子情報通信学会論文誌 Vol. J91-D, No.12, pp.2904--2914	(長野伸一, 鯉坂恒夫) ファンクションポイント法と呼ぶ機能規模メトリクスを, 情報システムではなく制御系に適用し, かつオブジェクト指向方法論を用いる方法を提案した.
35. Sensing Web Project -- How to Handle Privacy Information in Sensor Data [査読付]	共	2008年12月	Proc. 12th Int'l Conf. on Information Processing and Management of Uncertainty in Knowledge-Based Systems, pp.863--869	(M. Minoh, K. Kakusho, N. Babaguchi, T. Ajisaka) センサデータに含まれる個人情報適切に処理して, センシングウェブとして活用する方策について述べた.
36. センサ情報共有のためのアーキテクチャとデータ形式標準 [査読付]	共	2009年2月	人工知能学会誌 24巻, 2号, pp.202--207	(満田成紀, 鯉坂恒夫) センサデータをWeb化するためのデータ記述様式, 質問言語処理, およびシステム構成について提案した.
37. The Open Data Format and Query System of the Sensing Web [査読付]	共	2010年6月	Proc. 13th Int'l Conf. on Information Processing and Management of Uncertainty in Knowledge-Based Systems, pp.680--689	(N. Mitsuda and T. Ajisaka) センシングウェブにおけるデータフォーマットのオープン化と問い合わせシステムに関する提案.
38. Proposal for Requirement Validation Criteria and Method Based on Actor Interaction [査読付]	共	2010年10月	電子情報通信学会英文誌 Vol. E93-D, No. 4, pp.679-692	(Noboru HATTORI, Shuichiro YAMAMOTO, Tsuneo AJISAKA, Tsuyoshi KITANI) ソフトウェア要求分析において, アクタ間のやりとりを解析するための規準について論じた.
39. 言語理論の話をしよう [査読付]	共	2011年11月	コンピュータソフトウェア (岩波書店) 28巻, 3号, pp.61--69	(関 浩之, 鯉坂恒夫) チョムスキー生成文法の型の存在理由と, 文脈自由・依存の間に認識できるより細かい型について論じた.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
40. タッチパネルディスプレイを用いた戻り読みにおける操作と注視パターンの関係 [査読付]	共	2015年2月	人間工学, 51巻, 2号, pp.131-140	(高島美穂, 松延拓生, 満田成紀, 福安直樹, 鯉坂恒夫) 電子書籍の読みやすさをアイカメラを用いた実験で追及した。筆頭著者は指導した大学院修士課程学生。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. センサ情報の共有		2010年3月	情報処理学会	人間ではなく機械が発生源（センサ）である情報のウェブ化について述べた。
2. ソフトウェアにおける全体論と還元論		2015年5月	電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会	ソフトウェアの仕様記述からプログラムへの変換が困難である原因について議論した。
2. 学会発表				
1. センサアプリケーションと連携したソーシャルメディアのための情報公開フレームワークの提案	共	2015年3月	情報処理学会第93回グループウェアとネットワークサービス研究会, 2015-GN-93-3	(松井麻吏奈, 満田成紀, 福安直樹, 松延拓生, 鯉坂恒夫) ソーシャルメディアにセンサ情報を反映させる手法に関する研究。
2. 圧縮センシングを用いたセンサアプリケーションの開発効率化を目的としたシステム構成法		2016年3月	情報処理学会第78回モバイルコンピューティングと	(谷川博哉, 満田成紀, 福安直樹, 松延拓生, 鯉坂恒夫) ウェアラブルデバイスを用いたアプリケーション開発法。
3. 情報システムのパターンとバリエーションの把握に向けた変更要求分析	共	2016年3月	電子情報通信学会技術報告Vol.115, No.508, SS2015-76, pp.1-5	(久保綾加, 鯉坂恒夫, 福安直樹, 満田成紀, 松延拓生) ソフトウェア変更要求からみた完全性の追求。
4. アクセシビリティ向上を目的としたHTML属性記述の分類と系統化	共	2016年6月	情報処理学会第192回ソフトウェア工学・第41回組込みシステム合同研究会	(松井真子, 松延拓生, 満田成紀, 福安直樹, 鯉坂恒夫) 目的が分散している属性記述を整理した。
5. 情報システム開発におけるソフトウェア資産の上流シフトへの対応	共	2016年6月	ソフトウェア・シンポジウム2016, 開発プロセス 2	(松山浩士, 鯉坂恒夫, 飯ヶ谷拓真) プログラムやデータテーブルの自動生成による開発視点の変化について。
6. 設計モデルのリファクタリング手法の適用領域分割による組み合わせ	共	2016年6月	情報処理学会第192回ソフトウェア工学・第41回組込みシステム合同研究会	(榎原由季, 満田成紀, 福安直樹, 松延拓生, 鯉坂恒夫) プログラムに対して用いられるリファクタリング手法を設計レベルで試行した。
7. ソフトウェア仕様記述法の適用による物語学の精密化	共	2017年3月	電子情報通信学会技術報告Vol.116, No.512, SS2016-80, pp.121-126	(大木美奈子, 鯉坂恒夫, 福安直樹, 満田成紀, 松延拓生) プロップの民話の形態論をUMLで記述した。
8. アイトラッカを用いた広視野角目視検査訓練システムの提案	共	2017年10月	ヒューマンインタフェースシンポジウム, pp.653-658	(佐藤弥由, 松延拓生, 満田成紀, 鯉坂恒夫) 全体視と焦点視のバランスの検討。
9. 多様なIoTデバイスとの接続を容易とする軽量インタラクションフレームワークの設計 [査読付]	共	2017年11月	ソフトウェア工学の基礎XXIV, pp.117--122, 近代科学社	(松井真子, 満田成紀, 福安直樹, 松延拓生, 鯉坂恒夫) デバイス接続プロトコルを調整する議論。
10. ウェブサイトデザインのためのフレームワーク組み合わせ手法の提案 [査読付]	共	2017年11月	ソフトウェア工学の基礎XXIV, pp.123--128, 近代科学社	(島藤大誉, 満田成紀, 福安直樹, 松延拓生, 鯉坂恒夫) 複数のウェブ制作フレームワークの設計思想を調整する議論。
11. アプリケーション開		2019年1月	電子情報通信学会	(辻原拓弥, 福安直樹, 満田成紀, 松延拓生, 鯉坂恒夫)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
発事例を対象としたテスト設計によるプロセス改善への影響調査			ソフトウェアサイエンス研究会 pp. 43-48	ソフトウェアのテスト計画に関する提案.
12. 気が利くシステムのためのマイクロサービスアーキテクチャの提案	共	2019年3月	情報処理学会第227回システム・アーキテクチャ研究発表会	(長田直也, 満田成紀, 福安直樹, 松延拓生, 鯉坂恒夫) ユーザの状況を察知する方策の検討.
13. 時間の扱いを考慮した複数種類のセンサーデータ同期管理フレームワークの提案	共	2020年3月	電子情報通信学会技術報告SeMI2019 (136)	(武田悠, 満田成紀, 福安直樹, 鯉坂恒夫) 時刻印に対する対応の異なるセンサーデータの共通的扱い.
3. 総説				
1. ソフトウェアサイエンスの研究最前線	単	2008年	電子情報通信学会情報・システムサイエティ誌	ソフトウェアサイエンス研究の推進方策.
2. 「教育は芸」	単	2009年	コンピュータソフトウェア	PBLが流行り出した頃の教育論.
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. インドにおけるソフトウェア技術開発の展望	単	1995年	情報処理	(翻訳編集)
2. ICSE'96 会議報告	共	1997年	コンピュータソフトウェア	ソフトウェア工学のフラグシップ国際会議の報告.
6. 研究費の取得状況				
1. 柔らかなソフトウェア部品に基づくソフトウェアの超柔構造に関する研究		1995年～1996年	新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)	代表 48,000千円
2. ソフトウェアアークモデルに基づく発展パターンの発見と発展支援		1996年～1999年	科研費 重点領域研究(2)	代表 5,700千円
3. メディア情報解析による質的情報の評価指標に関する研究		2000年～2002年	科研費 基盤研究(B)(1)	代表 7,100千円
4. e-Society基盤ソフトウェア		2003年～2009年	文部科学省	代表 36,749千円
5. 情報の微視的意味構成とその計量に関する研究		2004年～2005年	科研費 萌芽研究	2,600千円
6. 先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム		2006年～2009年	文部科学省	分担(代表は大阪大学) 53,109千円(和歌山大学配当分)
7. センサ情報の社会利用のためのコンテンツ化		2007年～2009年	科学技術振興調整費	代表 29,446千円
8. (株)サイバーリンクスとの共同研究		2008年～2020年	和歌山大学	代表 13年間総額13,000千円
9. ソフトウェアの精密分析/設計		2009年～2010年	科研費 挑戦的萌芽研究	代表 2,900千円
10. 成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成(enPiT)		2016年～2020年	文部科学省	ビッグデータ・AI分野連携校責任者, 拠点は大阪大学 20,523千円
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		

学会及び社会における活動等

年月日	事項
6. 研究費の取得状況	
1. 2003年4月～2007年3月	日本ソフトウェア科学会 ソフトウェア工学の基礎研究会主査
2. 2003年4月～2007年3月	日本ソフトウェア科学会 理事（企画担当）
3. 2003年5月～2005年5月	システム制御情報学会 常任理事
4. 2004年1月～2005年12月	日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員
5. 2004年8月～現在	裁判所専門委員（和歌山地方裁判所所属）
6. 2005年4月～2007年3月	京都大学 数理解析研究所 専門委員会委員
7. 2005年5月～2010年5月	システム制御情報学会 評議員
8. 2008年5月～2010年5月	電子情報通信学会 ソフトウェアサイエンス研究専門委員会委員長
9. 2011年4月～現在	大阪府立岸和田高等学校 スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員
10. 2012年4月～2015年3月	和歌山市 情報化推進補佐官
11. 2013年1月～2014年12月	日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員
12. 2015年12月～2017年11月	日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員